

先代の虹

奨励	渡辺 圭一郎〔わたなべ・けいいちろう〕
奨励者紹介	日本キリスト教団京都丸太町教会牧師

更に神は言われた。
「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」
神はノアに言われた。
「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

（創世記 9章 12—17節）

今までどおり語れない

この創世記9章は、ノアの洪水物語においてはフィナーレと言える場面です。神様は大洪水の後、ノアと再び契約を交わされます。その契約は、もう二度と大洪水をもって人類を滅ぼさないという約束でした。神様はこの約束のしるしとして「虹」を示されたため、「虹」は平和のシンボルだと言えます。虹は、神様が地球とそこに住む人間を愛によって守られていることを物語っているからです。
しかし2011年3月11日に東日本大震災が起こってしまいました。このノアの洪水物語と、地震による東日本を襲った津波とは、質的にも規模的にも異なるという見解もあるでしょう。しかし、実際問題として教会で、子どもたちや大人たちと聖書を読むなかで、私には今まで通りこの箇所を読むことができなくなりました。地震・津波を大なり小なり身近に体験した私たちにとっては、「ノアの洪水の物語」は身近な、生々しい記憶を呼び覚ます、また何かを語りかける物語となったのではないのでしょうか。
私の所属する京都丸太町教会（2011年度当時）では、教会に集う子どもたちのための夏のキャンプが7月に行われました。その時のキャンプテーマが「ノアの洪水の物語」でした。これは私たちが意図的に決めたのではなく、「教師の友」という教会学校の教師用の本に則って決められたものです。とても話すが難しく、苦しく感じられるテーマでしたが、2011年を象徴する主題に向き合う機会を与えられたように今は思います。

絶句する人間の姿

さて話は少し飛びますが、2011年7月31日、私は教会から夏季休暇をいただき、宮城県の仙台市にある仙台北教会の礼拝に出席して参りました。私どもの教会には、被災地に行きたくても、様々な事情で行けない方がおられました。また、何か役立てることがしたいという強い思いをもつ方も大勢おられたのですが、私たちは具体的に何を支援すればよいのかわからない状況でした。そこで私が行くことで、現地に行けない教会員の方々の目や耳になれば、あるいはせめて教会員の思いを携えて祈りを捧げられればと思い出立しました。幸い弟が被災地でボランティアに励んでいましたので、私の水先案内人となってくれました。
私が出席したのは日本キリスト教団の仙台北教会の礼拝でした。この教会の主任牧師の小西望先生と京都丸太町教会との間に繋がりがあったこともあり、この教会の礼拝に出席いたしました。私は現地で、どのような礼拝が守られているのか、不安と希望を抱えつつ出席いたしました。
礼拝のなかで小西望牧師は、役に立ちたいと被災地を訪れるボランティアの方々が、異口同音に口にされる言葉を紹介されました。それは「言葉がありません」の一言だと。「あまりにも大きな被害、あまりにも大きな課題の前に絶句する。言葉がありませんというのが、現地を訪れた人びとの肉声である」と語られました。また、絶句する姿は「わたしたち」（教会員や被災地の方々）の肉声でもあると語っておられたように感じました。震災の現実の前に、ただただ絶句するしかない。それが遠くにいる者、ボランティアに訪れた者、被災地に生きる者のありのままの姿なのだと教えられました。

先代（仙台）の虹

しかし、ほんのささやかな希望を、礼拝のなかの絶句する「わたしたち」の群れの中で見させて顶きました。
吉野弘という詩人が「虹の足」という詩を詠んでいます。山路を登るバスの中から、ある村に虹のアーチがずっと足をおろすのを見かけます。しかし、その「虹の足」の詩のなかにある村人には、虹が見えません。まさに、被災地を訪れた、どこか後ろめたさを抱える者だからこそ、この地にずっとおりる神様の虹の光が見えたような気がしました。詩のなかでバスの乗客が村人に「おーい、君の家が虹の中にあるぞオ」と思わず叫んでいます。私もそのような驚きと感動を、哀しみのなかで味わいました。
その日の礼拝のなかで、牧者が取り上げた聖書箇所は、ルカによる福音書9章10—17節の5000人の食卓の場面でした。男だけでも5000人の群衆が、空腹を抱えている場面です。イエス様は弟子たちに「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（9章13節）と、半ば無理難題を命じられる場面でもあります。当然弟子たちはうろたえ、手元にはパン5つと2匹の魚しかありませんと、自分たちの無力さを訴えます。
説教では、5000人の群衆という現実の前に、無力さを嘆く弟子の姿と被災地の方々の思いとが重ね合されていました。「たったこれだけしかない」「これだけでは、どうにもならない」と、現実の大きな課題の前で嘆き、絶句する姿です。
「しかし、イエス様がそのパンと魚を取り、弟子たちに渡されると、全ての人が食べて満腹したのです」。小西牧師は、イエス・キリストが祝福されると、「たった」と思える「5つのパンと2匹の魚」も、全ての人を食わせて、満腹させることができたと言われました。イエス・キリストの手に渡ることにより、事態は大きく変えられることの希望を語りかけられたのです。そして具体的な事例として、被災地に入ったボランティアの人の働きを挙げました。ボランティアとして入ってきた人と、被災した人びとの間には、会話が生まれます。今まで、関わる事が無かった人と人が出会い、そこに、信頼とも呼べる、目に見えない絆が生まれてきています。今、この被災地にあって、何か新しい物が芽生え出している、と。「たったこれだけ」と思える無力感、ただただ絶句するしかない現実を前にしても、キリストの手に渡れば事態が変えられることを信じて、歩み出そうとする人たちの姿。そこにノアの時代にもあったであろう光景、荒れ果てた大地に、神の光が差し込み虹が足をおろす希望の世界が、この仙台のキリストの教会に再現されているような錯覚を覚えました。それで題を「先代の虹」としたわけです。

絶句するなかにも

聖書の言葉を信じ委ねていくキリスト教の信仰の世界は、実に不思議だと改めて思います。イエス様は、5000人の空腹を抱えた群衆が目前にいる「にもかかわらず」、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（9章13節）と命じられました。すると弟子たちの予想に反し、事態は大きく変えられたようです。
東日本大震災によって、多くのものを失い、語るべき言葉も失った人びとが「にもかかわらず」、聖書の言葉を受け止め歩み出す姿。そこに、やはり人間の目にはささやかであっても、昨日までとは違う新しい事態、絆が生まれるという事態が始まっていきます。今の段階では、ほんのわずかな事態の変化、他の人から見れば一笑に付すほどの微々たる出来事かもしれませんが、限らない可能性を秘めた大きな一歩を踏み出されたように見えました。聖書の教えへの信仰（信頼）は、人に無限の可能性と力を与えることを思わされます。
最後に、聖書の言葉をお届けする働きをする者として、これからも「ノアの洪水」物語を読むごとに2011年の出来事を思い起こし絶句しつつ語ることでしょうが、絶句する状況のなかでも、聖書の言葉への信頼によって立ち上がってゆく人びとの姿をも思い起こして、希望をもって語れるのではないかと思います。そして、先代のノアから地上に注がれている虹という神の光は、今もどのような状況に置かれている人たちであっても、私たち一人ひとりの人生に差し込んでいることを、被災地の方々の信仰の歩みを通して語られるのではないかと、そう思っています。